
さるかに合戦

雑兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さるかに合戦

【Nコード】

N3622P

【作者名】

雑兵

【あらすじ】

猿に母蟹を殺された子蟹達は復讐を決意しました。

昔々あるところに、おむすびを持った蟹と、柿の種を持った猿がいました。

猿が蟹に言いました。

「あんたのおむすびとあたしの種、交換しな〜い？」

「あらあら、ごめんなさいねえ。私、お腹の赤ちゃん達の為に沢山食べなきゃいけないの。そんなに小さな柿の種とは、交換できないわ」

「な〜に言ってるのよ。おむすびは、食ったらそれまで。それにひきかえ柿の種を埋めて育てれば、いくらでも柿が食べられるのよ」

「まあ。それは素晴らしいわねえ」

こうして、蟹は柿の種を、猿はおむすびを手に入れました。

猿はあ〜と言う間に、おむすびを平らげました。

「おむすびマジヤバイんですけど〜」

蟹は柿の種を地面に埋め、毎日せっせと育てました。

そしてついに、沢山の柿の実が生まれました。

蟹は早速柿を食べようと思いましたが、蟹は木に上れませんでした。

そこへ、柿の種をくれた猿がやって来ました。

「あら、猿さん。この間は柿の種をどうもありがとうねえ。やっと実が生ったのだけど、私ったら、木に上れない事をすっかり忘れちゃって困っちゃったわあ」

「それ〜なら〜、あたしが代わりに柿の木に上って柿の実を採ってあげる、みたいな〜？」

「あらまあ。そうしてもらえると、助かるわあ」

「お安い御用、って感じ〜？」

蟹が事情を説明すると、猿は快く柿の木に上ってくれました。

しかし、

柿の木に上った猿は自分ばかり柿の実を食べて、蟹には一つも柿の実をくれません。

「やっぱスイーツよね〜」

「あらあら、美味しい柿の実が生ったみたいねえ。私にも、一つくださる？」

「くださる？なにそれ、猿をバカにしてんの〜？マジありえないんですけど〜」

「あらやだ！そんなつもりは無かったのよお。ごめんなさいねえ」

「別に〜ど〜でもい〜ってゆ〜か〜。そもそも柿の実全部あたしの物じゃないですか〜」

「え？」

「だって〜、あたしが持ってた柿の種だったわけだし〜」

「それを私のおむすびと交換したんでしょ？」

「え〜？あたしそんなの知らな〜い」

「そ、そんな……」

蟹は気付きました。

自分は猿に騙されたのだと。

猿は蟹が木に上れない事を知ってて、おむすびと柿を一人占めしようとしたのです。

ですが、もうすぐ子供が産まれる蟹にはどうしても柿の実が必要です。

蟹は猿に頼みました。

「おねがい。柿の実をちょうだい」

「うっさいわね。それでも食べてれば」

猿はまだ青くて硬い柿の実を、蟹に投げつけました。硬い実が蟹の体に当たり、蟹の脚が一本折れました。

「あぁっ！」

「アハ！チヨウウケルんですけど。えいっえいっ」

バキッ

ぐちゃッ

猿は次々にまだ青くて硬い、とても食べられそうにない柿の実を蟹に向かって投げつけました。

蟹は避けられず、柿の実が当たる度に甲羅にはひびが入り、脚は折れ体を支えられなくなります。

それでも、蟹は必死にお腹に抱えた卵達を庇います。

「やめ……やめて……。赤ちゃんが……いるの……」

「はあ？あたしそんなの知らない」

蟹が懇願しても、猿は硬い実を投げ続けます。

すでに蟹の眼は二つ共潰れ、痛みも感じなくなってきました。

ごめんねえ、赤ちゃん達。ママ……あなた達に……会えない、の

……

蟹は死にました。

蟹が最期に思ったのは、
自分を騙した猿への憎しみでも、
猿の企みに気付けなかった悔しさでもなく、
愛する我が子達に会えない事への寂しさでした。

柿の実を食べて満腹になった猿は、どこかへ行きました。

「やっだ〜。ダイエットしなきゃ〜」

しばらくすると、すでに死んでいるはずの蟹の体が蠢きだしました。

その体の下から、小さな赤いものが出てきます。
それは蟹の子供達でした。

母蟹が必死に守ったことで、誰一人死ぬことなく産まれる事が出来たのです。

ですが、子蟹達の中に産まれた事に対する喜びはありませんでした。

「ママ」

「ママ……」

「ママあ」

「ママー！」

口々に母蟹に呼びかけますが、返事はありません。
呼びかけが、やがて嗚咽に変わっていきます。

「ママ、マッ……うっ、うわあ……あああああああああん！」

「!!!!!!!!!!」

子蟹達は、涙が涸れるまで泣きました。
涙が涸れると、悲しみのいた場所に、違う感情がいました。
憎悪でした。

時は流れて

猿への復讐を決意した子蟹達に賛同する者達が現れました。
栗、蜂、牛糞、臼です。
四人は猿を家に招きました。

「こんにちは!.....あれ?」

猿が家を訪れると、誰も居ません。
猿は囲炉裏のそばで待つことにしました。
囲炉裏の中には、栗が隠れていました。
囲炉裏の中で熱くなった栗が跳びだし、猿の股間に抱き付きまし
た。

猿は大火傷をしました。
猿は慌てて水瓶に飛び込みます。
水瓶の中には、蜂が隠れていました。
蜂は猿の乳首を刺しました。

あまりの痛さに、猿は家から走り出ました。

家の前の地面には、牛糞がいました。

牛糞を踏んだ猿は引っくり返りました。

牛糞は猿の体を這い回りました。

乳首や股間に牛糞が染み、その痛みと牛糞の臭さで猿は悶えます。

そこへ、屋根にいた臼が飛び降りました。

臼に潰されて、猿は死にました。

めでたしめでたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3622p/>

さるかに合戦

2010年12月14日18時03分発行